

『大学入試センター試験 必携ガイドブック』および 「2014年センター英語分析と指針」

竹岡 広信

1. 『大学入試センター試験 必携ガイドブック』

昨年に引き続き、数研出版の『英語プレノート』『英語40分プレノート』の付録として『大学入試センター試験 必携ガイドブック(以下、『必携ガイドブック』とする)』の執筆をすることになった。

10年以上前に他社からではあるが『センター試験英語が面白いほどとける本』(中経出版)という題名でセンターの本を出した。この本の執筆動機は「怒り」。その当時のセンター試験の様々な攻略本が「センター試験」と無関係な、旧態依然とした文法などを扱っていた。特別な「テクニック」のようなものが多数書かれていて、とても英語力の向上を願っているものではなかった。拙著の「まえがき」には、「この本は『真正面から英語に取り組むための訓練の場』を提供することをめざしています」なんて書いている。今の自分が読むと、やや気恥ずかしい気もするが、その願いは今でも変わっていない。

あれから10年以上たった今、高校の現場に出回っている「センター関連の類書」は山のようにあり、相変わらず「些末な知識」を満載している本も数多くある。日常生活での使用頻度を無視した(つまりセンター試験には出ない)どうでもいい細かい知識が数多く書かれたもの、怪しげな「攻略法」が事細かに書かれたもの、アクセント類出語と称して「気が遠くなるほどの多くの単語」を扱っているもの、生徒がそんなものを与えられ、使わされていると思うだけで涙が出てくる。現状は10年前とさほど変わっていない。

予備校で、生徒に「-ateで終わる単語は、2つ前の母音字にアクセントがある、という原則を知っている人は手を挙げて」というと、10年前と同様にまばらにしか手が挙がらない。思わず、「君たちは6年間もチャンスがあったのに、なぜそんな基本を習ってきてないの?」と言ってしまふ。上位者の生徒でさえこの原則を知らないことが多い。だから、

concentrateのように「たまたま知っている単語」ならアクセントの位置を間違えないが、知らない単語になると間違ふことが多い。

以上のような現状を考慮して、『必携ガイドブック』を編むことにした。アクセント・発音問題対策として「最小限にして最大限の効果」をあげるようなリストを作った。特に使用される時期が秋以降であることを考えれば、「他の教科の邪魔にならない程度の最小限の事項」が要求される。アクセントは私が長年研究した「覚えやすい順序」に配列されたものを、発音は最小の原則を問題形式にしたものを載せ、生徒の負担が増えないような工夫を施した。また、編集部の方に、「音声関連問題には音声教材をつけてほしい」とお願いしたところ、ダウンロードという形で実現していただいた。この本が「おまけ的存在」であることを考えれば、よくやっていただいたと感謝している。

英文法は、センターの頻出過去問題を中心に編集し、これもギリギリの数まで絞った。センター試験では、第2問Aの4択形式の問題のうち、語彙・語法の知識を求められるものが半数を超える。そのような観点から過去問題を精選し、さらに、2014年のセンター試験で出題されたものは省き、新たなものを追加した。英熟語は、配点が4点であることを考え、予想問題を約30題に絞った。

知識問題以外は、2014年の問題を用いて、解き方を解説した。読解系は、原則的に「各パラグラフの要旨メモ」が有効であると考えている。よって、それを視覚的に見てわかりやすいように提示した。この「パラグラフメモ(通称パラメモ)」をやっていない生徒は非常に多い。確かに「そんなことをすればかえって時間がかかってしまう」という生徒もいる。しかし実際やらせてみると、「パラグラフメモをしてから、点数が飛躍的に伸びました」という声がほとんどもだ。パラグラフメモは、頭の中を整理しながら

ら文を読むには有効である。もちろん、二次試験や私大の長文にも有効である。センター試験のための勉強は、「センター試験のためだけの勉強」にせず、二次試験や私大の試験のための訓練と位置づけてやれば、センター後に慌てなくて済むはずだ。こうしたことを念頭において、『必携ガイドブック』を書いた。

そして、これらの1つ1つが、校閲の先生方や数研のスタッフの厳しい目のおかげで一層よいものになった。大感謝である。

また、今年のセンター試験を実際に受験した生徒のデータを取り、あらかじめ分類した3つの集団(「得意」「普通」「苦手」)それぞれにつき、正答率を各設問に示した。以下がそれぞれの母集団の人数と平均点である。

	得意	普通	苦手
平均点	181.9	154.2	116.2
人数	99名	85名	60名

来年の受験を控える3年生には、まず2014年センター試験の問題を解かせてみて、間違えた所を『必携ガイドブック』の正答率を参照して誤答分析をさせ、次に対策を考えさせると効果的だと思う。

2. 英語教育の変革のうねり

英語教育改革がいよいよ本格的に始動しはじめた。文部科学省も企業、予備校を巻き込み総力戦で取り組む様相である。今年になって有識者会議も立ち上げられ、いよいよ英語教育にメスが入られる。「日本で英語を習っても使えない」「日本人は英語が話せない」という通説を覆すチャンスである。

従来から「受験英語」と「実用英語」という分け方がされることが多いが、実は「受験英語」といえども、「実用英語」を基盤としていなければ脆弱なものになってしまうのである。高校や予備校などの現場で英作文、英語表現を教えていて、痛切に感じるのは「たとえ受験英語といえども、コミュニケーション力の延長線上のものでなければ武器にはならない」ということだ。つまり「実際に使う」ということを基盤にしていない英語では、受験といえども使えないということである。

次の英作文の問題を「コミュニケーション」を意識していない生徒にやらせると大変なことになる。

問題：次の日本語の意味を英語にせよ。

最近では、電車に乗ると長距離通勤のためか、乗客が居眠りをしている光景をよく見かける。

「苦手」な生徒は、「乗る」は get on ~, 「光景」は sight, となり、「乗客」は、忘れました！という具合である。そして、できあがったものは、およそまともな英語とはほど遠い代物になってしまっている。→ Recently, I see the scenery that many [空白] are sleeping in a train.

一方、「伝えたいことを考え、それを自分の言葉で伝えるコミュニケーション能力」があれば、「乗る」とか「光景」などには目もくれず、和文から情景を思い浮かべ、There are a lot of people sleeping on the train. ぐらいの文が口から出てくるはずだ。

「長距離通勤のためか」の部分は、距離を時間に置き換えて、probably because it takes a long time to go to work. ぐらい書ければ「入試の答案」としては合格点だろう。しかし、よくよく考えてみれば、日本人が電車の中で眠っているのには、大前提として「日本の治安のよさ」が挙げられるはずだ。だから、論理的思考ができれば、この入試問題自体に問題があることに気がつくはずだ。論理的な英文にするためには probably because Japan is a safe country. としなければならない。

このような「論理的にものを考えて、その内容を英語にする力」を身につけさせることが何よりも大切だ。センター試験作成者も願いは同じだと思う。

3. 2014年センター英語分析

a. 第1問(発音・アクセント)について

発音は昨年同様、12語中8語(約70%)が外来語であった(glove/onion/oven/casual/classic/label/loose/pause)。共通一次からセンター試験に移行してからは出題されていない単語が多い(loose は'89追試と'95追試)が、いわゆる「発音頻出語」が多いため、真面目にやってきた学生は落とさなかったものと思われる。今後も「外来語」が狙われるだろうが、あくまで日常生活での頻度が高いものに限られるであろう。よって「カジノ」casino、「サンタクロース」Santa Claus、「カリスマ」charisma、「クレゾール」cresol、「コスモス」cosmos,

「ミサイル」missile, 「ベテラン」veteranなどは出題される可能性は少ないように感じる。

アクセントも、オーソドックスな問題で「名詞は前にアクセントがあり、動詞は後ろにアクセントがある」という原則に当てはまる語が, novel, audience, funeral, origin, atmosphere, categoryの6語。また、動詞とアクセントに変化がない〈動詞+特殊語尾〉の単語が, survival(<survive), equipment(<equip)の2語。特殊語尾の名詞はparade「パレード」(lemonadeなども同じ箇所アクセント), priority(-ity)の2語。特殊語尾(-ate)で終わる単語が2語であった。いずれも奇をてらったものでなく良問である。

なお過去問題からの出題は, rescue('95 追), parade('91), novel('00), survival('97 追), atmosphere('87 追, '98 追), reluctant('01)の6語であった。

b. 第2問(文法・語彙・語句整序)について

「コミュニケーション」な英語を意識した文法・語彙・語句整序であった。「(日常英語では頻出でないが入試問題での)頻出」英文法は出題されず、「コミュニケーションの土台となるもの」が出題されている。「受験のための英語」といっても、コミュニケーションを土台としていなければ伸びない、ということが確認できるような問題である。everやseeなどの書くための基本語彙・文法が身につけていれば問題なく解ける。

Even though I (A) spent two years in the US, I've never (B) to the Grand Canyon. Maybe I'll go next year.

- ① A: ever B: been ② A: ever B: visited
③ A: once B: been ④ A: once B: visited

[2014年度 センター本試験]

everは、=at any time「ないかもしれないが、もしあればいつか」という仮定を示す副詞だから、通例肯定文では使われない。

[例] Have you ever been to Tokyo?

「東京へは、行ったことがないかもしれませんが、もしあればいつか行ったことがありますか?」

everが肯定文で使われるのは、条件節の中、条件

節の代用としての関係代名詞節の中, the most beautiful mountain I have ever seenなどの最上級やthe firstなどの後の節中, また, an ever increasing... など一部の分詞の前に置かれる場合である。

中位の学生のおよそ半数の学生がeverを選んでいることを考えると、難問に属することになる。しかし、英語を6年間もやってeverひとつ使えない生徒がこんなにいるのは本当に由々しき事態であろう。

ちなみに, visitは「他動詞」と断定している問題集を見ることがあるが, 正しくは「visitが動詞で, 場所を伴う場合には, visit to ~の形にはしない」ということである。場所を伴わない場合にはvisitは自動詞として使われる。高校の同僚のイギリス人がMy parents are visiting today.「うちの親が今日(家に)来るんだ」という発言をしていたが, もちろん何の問題もない英語である。

いたずらに文法に重きを置いた授業や, 実用頻度を無視した問題を数多く掲載した英文法問題集の類いが, 高校の現場から消えることを願ってやまない。何度も言うが, 文法ばかりやっているのに, everひとつ使えない生徒が半数以上いるのである。この状態を看過するわけにはいかない。

c. 第3問の変更について

第3問B, Cには大きな変更があった。従来の①「抽象的な表現から具体的な表現への流れの確認」②「代名詞の確認」③「butなどによる逆接の確認」を柱とする第3問Cがなくなり, 旧来の第3問Bが第3問Cとなった。そして, 第3問Bには「不要文の削除問題」が登場した。

その中の1問は, 「田舎から都会への人口流出」がメインテーマで, 突然「都会は便利だけどアパートでの暮らしは寂しい」なんて文が出てくる。まるで生徒の自由英作文の採点をしているような気分になり, 「なるほどよい問題だな!」と実感した。従来の第3問Cも良問だったが, 今回の問題は, 従来の問題に「結束性(cohesion)」の観点が付加されている。これは英作文, あるいはスピーキングにおいて非常に重要なことであるが, 日本人学習者が見落としがちなポイントである。

野球は、アメリカの国民的スポーツのひとつである。多くのアメリカ人は、子供の頃、近所の野原で野球をして大きくなる。泥まみれになり、隣の誰それさんは自分より上手になったとか、ならないとかいいながら、他人と共同生活を送っていくすべを身につけていく。あるいは他人に打ち負かされるという屈辱感を受け入れる訓練を重ねていく。

[1998年度 京都大学・英作文]

この英作文の第1文では野球が「国民的スポーツ」とあるが、第2文以降は「子どもの精神修養の場」という内容になっており、第1文のアイデア（「国民的スポーツ」）との関連性が薄い。これでは「論理の流れ」「ワンパラグラフ・ワンアイデア」は身につかない。センター試験作成部会の意図には、このような英作文に対する皮肉も入っているのではないだろうか。

「得意」の集団では、正答率が全て90%を超えている。その一方、「苦手」の集団では、問1が82%、問2が63%、問3が73%と差がついている。来年以降どのような問題が出るか楽しみだ。

d. 第4問Aの変更について

今年は第4問が難しかった。特に第4問Aの問4は出来が悪かった。先ほどの「得意」の正答率で平均40%、「苦手」では20%ぐらいしかない。

2つのグラフに示されている、“magnet”と“sticky”という概念を理解できずに戸惑った生徒も多かった。だがそれ以上に、従来ないタイプの問題「最後の段落に続く可能性のある話題はどれか」に啞然とした生徒が多かったのが原因の1つだろう。

最終段落の冒頭は次のとおり。

The study went on to explore the reasons why “movers” leave their home states and “stayers” remain.

「研究はさらに続けて、なぜ『移住者』は自分の州から出たのか、また、なぜ『残留者』は残っているのかを調べた。」

(1)「なぜ他の州に行く人がいて」(2)「なぜ自分が住んでいる州に残留する人がいるのか」という2つのことを調べた、と書いてある。この後の記述を見る

と、最後まで『移住者』に関する理由が述べられている。よって、2つ目の「なぜ『残留者』は残っているのか」に関する記述の具体化部分が欠落していることがわかる。この内容を満たす選択肢は①「一部のアメリカ人が自分の州に残留する理由」しかない。パラグラフメモをして、全体像をつかんでいれば平易な問題である。

間違えた人の50%以上が選択肢③の「移住する人が他の州で探す職業の種類」を選んでいる。最終段落に目をやると、“The most common reason they gave for moving is to seek job or business opportunities.”「彼らが移住の原因として挙げた最もよくある理由は、仕事や商売の機会を探すことであった」とある。間違えた人は、この記述を「漠然」と考え、その「具体」を探したために、何となく③を選んだのだと推察される。

作成部会は、従来の第3問Cの目玉であった「漠然から具体」をワナにはめる問題を作り、第3問Cの幕引きをしたのである。面白い！

e. 第5問・第6問について

それぞれ、全体で650語～700語ぐらいの英文を読ませて、情報をつかむ問題。決して難しい英文ではないが、すばやく解かねばならない。このあたりの問題処理能力が「得意な者」と「苦手な者」を分ける主な要因であろう。多読・多聴を軸とした勉強こそが骨太の力をつけるはずである。現在、主流ではなくなりつつあるとはいえ、「50分の授業で教科書1～2ページ進む」という旧態依然とした授業の形式は見直されなければならない。

1回の授業で、「1つのまとまりのある文を通読して、その文が何を言いたいのかを答えさせる。できれば、1つのまとまりのある文を聞かせて、その文が何が言いたいのかを答えさせる」というのが主流になることを願う。

(洛南高等学校講師、駿台予備学校講師、竹岡塾主宰)

※予備校にて教員対象の授業を春、夏、秋に受け持つ。
『Write to the Point』、『Clues to Reading』、『Grammar Gym』（以上教研出版）など著書多数。